

## 板橋区における障がい者虐待の通報等受付状況

令和5年度における障がい者虐待の通報受付状況について、2月末時点での件数を以下のとおり報告する。

### 1 受付場所別の内訳

受付場所	令和4年度	令和5年度 (2月末時点)
虐待防止センター	17	24
福祉事務所(3ヶ所)	6	2
健康福祉センター(5ヶ所)	2	2
障がい政策課	20	19
夜間等相談窓口	7	8
予防対策課	0	0
その他(東京都、警察等)	0	7
合 計	52	62

### 2 相談・通報・届出者の内訳

相談・通報・届出者	令和4年度	令和5年度 (2月末時点)
障がい者本人	11	14
家族・親族	1	5
近隣住民・知人	2	5
福祉サービス関係者	24	22
医療関係者	2	5
行政・教育機関	8	3
その他(労働局、警察、元支援員等)	4	8
合 計	52	62

### 3 被虐待者の障がい別内訳

※ 通報時本人より申告のあった種別(重複障がいは、それぞれに計上)

※ R5年度については2月末時点の件数

障がい	身体		知的		精神(発達含)		不明	
年度	R4	R5	R4	R5	R4	R5	R4	R5
人数	12	13	25	32	17	27	4	2

#### 4 虐待種別の内訳

※重複する場合はそれぞれに計上

※R5 年度については2月末時点の件数

種別	身体的		性的		心理的		放棄・放置		経済的	
年度	R4	R5	R4	R5	R4	R5	R4	R5	R4	R5
件数	14	36	4	4	26	29	7	5	15	5

#### 5 虐待者の内訳と虐待認定件数

虐待者	令和4年度		令和5年度 (2月末時点)	
	総件数 (実件数)	虐待認定 件数	総件数 (実件数)	虐待認定 件数
養護者	23	7	33	7
障害者福祉 施設従事者等	23	3	20	2
使用者	3	2	2	1
その他	3		7	
合 計	52	12	62	10

6 令和5年度に受け付けた通報・相談のうち、虐待認定したケース事例を抽出（虐待程度については、「資料4-2虐待の程度一覧表」参照）

NO	虐待種別		内容	状況・対応等
1	養護者	身体的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被虐待者と同居している兄との喧嘩が絶えず、兄から殴りかかられる、首を絞められる、引っかかる状態である。</li> <li>・喧嘩の際に兄が被虐待者の首筋を引っかかり、被虐待者にケガをさせた。</li> </ul>	<p>【緊急性：有り】被虐待者が、首を絞められる等の行為を受けている可能性があり、生命に関わる危険があること、ケガをしていること、兄と同居していることから、緊急性有りと判断した。</p> <p>【虐待認定：有り】聞き取り調査にて、関係者から、兄が本人の他害行動を制止する際に、首筋を引っかいたことを聞き取り、実際の傷跡を確認したため、身体的虐待ありと判断した。</p> <p>【虐待程度：中度】被虐待者の首筋に爪で引っかかれた傷を確認したため、中度と判断した。</p> <p>【対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本人から、兄との同居を継続したい意向を聞き取った。また、短期入所の利用を開始したことで兄のレスパイトができるようになり、兄との関係が改善したことを、計画相談員が保護者からの聞き取りで確認したため、分離は行わないこととした。</li> <li>・兄と距離をとるため、短期入所に加えて移動支援の利用を開始した。</li> <li>・通所先、計画相談員、福祉事務所にて見守り支援を行い、兄との関係が不穏になった際は情報を共有し、サービスの調整を行う支援体制を整えた。</li> </ul>
2	施設従事者等	身体的 心理的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職員が利用者の身体を叩いている。</li> <li>・職員が送迎の際に利用者の頭をボードで叩いた。</li> <li>・職員が利用者を「お前」「あんた」と強い口調で呼んでいる。</li> </ul>	<p>【緊急性：有り】被虐待者が当該事業所へ通所を継続していること、虐待が疑われる職員が勤務を継続していることから、緊急性有りと判断した。</p> <p>【虐待認定：有り】聞き取り調査にて、通報内容が事実であることを確認したため、虐待有りと判断した。</p> <p>【虐待程度：中度～重度】職員が、送迎時に利用者の行動を制止するため、ボードで利用者の頭を叩く行為が日常的に行われていたことを確認した。また、職員の口調が強く、利用者が職員を怖がっている様子があると聞き取ったため、中度～重度と判断した。</p> <p>【対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援現場を視察したうえで、支援方法について口頭指導した。</li> <li>・組織体制の改善が必要と判断したため、支援体制や職員の人員配置等が適切であるか、区の関係部署と連携し、支援状況等について確認する。不適切な支援状況にある場合は、適宜指導を行っていく。</li> </ul>

7 令和5年度に受け付けた通報・相談のうち、虐待認定以外のケース事例を抽出（虐待程度については、「資料4-2 虐待の程度一覧表」参照）

NO	虐待種別		内容	状況・対応等
1	養護者	心理的 身体的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幼少期より母から暴言・暴力を受けていた。大人になってからはなくなったが、最近再発している。</li> <li>・ 母から自分の行動を否定される。</li> <li>・ 一人暮らしはできないので、避難できる場所を知りたい。</li> </ul>	<p>【緊急性：無し】被虐待者からの聞き取りにて、手を叩かれる等の暴力を受けることがあるが、生命の危険はないことを確認したため緊急性無しと判断した。</p> <p>【虐待認定：判断できない】母の言動は、本人の問題行動を制止するための行為であること、本人からも高齢の養護者への金銭搾取等の問題行為があることを確認した。明らかに一方的な行為ではないことを把握したため、虐待有無については判断できないとした。</p> <p>【対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一人暮らしやグループホームへの入居を提案したが、いずれも希望せず、母と自宅で生活することを希望したため、早急な分離は行わないこととした。</li> <li>・ 被虐待者のレスパイト先として入院や短期入所を提案した。</li> <li>・ 通院はしているが、相談機関とのつながりがなかったため、相談支援機関を案内した。</li> <li>・ 被虐待者は、健康福祉センターに自身や家庭の状況を相談、報告していることを確認した。今後も健康福祉センターが本人の相談窓口となり、生命に関わる危険が予測される場合は早急に対応できるよう、地域での見守り体制を整えた。</li> </ul>
2	施設従事者等	身体的 心理的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 利用者の目を覚まさせるため、職員が利用者の手のひらを強く叩いており、利用者が泣いていた。</li> <li>・ 利用者の了承を得ずに、利用者をあだ名で呼んでいる。</li> </ul>	<p>【緊急性：無し】通所先の支援者から、本人はケガをしていないこと、生命の危険はないことを確認したため、緊急性無しと判断した。</p> <p>【虐待認定：不適切支援】聞き取り調査にて、通報内容が事実であることを確認したが、利用者の目覚めを促す支援方法として手のひらを叩いていたこと、叩く行為によるあざやケガはないこと、子ども扱いではなく、親しみの思いからあだ名で呼んでいることを確認した。本人は不意に泣くことがあり、叩く行為により泣くに至ったのか確認ができなかった。また、あだ名が本人の意にそぐわない呼び方であるかについても、被虐待者の障がい特性上、確認することができなかったため、虐待有りの判断までには至らないが、不適切な支援と判断した。</p> <p>【対応】</p> <p>施設に対して、本人、保護者から今後の支援方針の意向を確認したうえで、改めて職員で支援方法を検討し、結果を職員全員に周知するよう求めた。</p>